

OSIPPと朝日新聞社とが共催した「上方ITシンポジウム」が6月5日、新大阪のメルパルクホールで開催された(詳報は7月5日付の朝日新聞朝刊を参照)。

辻正次・OSIPP 研究科長の開会挨拶に続き、まず慶應義塾大学経済学部教授の島田晴雄氏が「日

は、「公的機関だけに任せず民間を参入させる二人三脚の方がよいサービスが提供できる。その際には、情報公開および評価のためのネットワークが必要となる」と述べ、「ITを活かした豊かな生活」を提言した(=写真)。

「デジタル時代のコミュニケーション。その光と影」と題し特別講演を行った作家の藤本義一氏は、自身は原稿を直筆で書いており「アナロ

は、デジタル化一辺倒の現代に対する批判も込めて語った。

パネルディスカッションでは、**テレビ朝日アナウンサーの丸川珠代氏が司会、朝日新聞社デジタル編集長の原淳二郎氏がコーディネーターを務め、パネリストとしてOSIPPの林敏彦教授、羽曳野市長・福谷剛蔵氏、女性だけの編集企画制作会社である株式会社エイガ**

アル社長・伊藤淳子氏、インターネットによるホテル予約サービスを提供する株式会社ベストリ

ザーブ社長・小野田純氏が参加。

女性によるSOHOである「W-SOHO」を発足させた伊藤氏はSOHOの現状を説明。市民のためのIT活用に積極的で公的サービスのデジタル化を進める福谷氏は、これからは「役所が出向くサービス」の時代であるとした上で、「自助・共助・公助」の組み合わせによる効率的な社会支援体制の実現が必要と話し、「ITC (IT + Communication)」という言葉を用いた。「お客様のために宿泊手続の効率化を進めてきたという小野田氏は、「既存の関連業界からの批判が必ず生じるが、批判を恐れて妥協をすれば、今度はお客様から否定される」と述べた。林教授は、「(ITを推進するためには) ハイテクだけではなくローテクも必要。勝ち組だけではなくその周辺でそれをサポートする者も必要」と指摘。

わかりやすく興味深い講演と、パネルディスカッションでの活発な討論に、定員1010名のホールがほぼ満席になるほどの盛況であった。

4月からニューズレター編集部のスタッフが一部変わりました。現場での編集作業は助手の永松伸吾が管理、調整し、院生の小西ひき子(D1)、木根森敦子、澤雅美(以上M2)、神余紀子、千葉美和、中山優、福嶋由里子、岩本暢(以上M1)が分担して取材・提稿・校正などに当たります。全体の構成、原稿チェック、レイアウト、DTPなどは饗場和彦(前OSIPP助手)が引き続き担当します。よろしくお願いいたします。

島田慶大教授が基調講演

原稿直筆で書く藤本義一氏「精神的なものも必要」

本経済新生の戦略—情報革命と生活産業の創出—と題し、基調講演。日本の経済政策の「積年の矛盾」を身近な例を用いて説明し、それを新内閣が解消する際、痛みを伴う「後始末型」の構造改革と同時に「前向き」の構造改革も行なうべきと主張。最も大切である「人的資本」のために必要不可欠な保育・医療・介護に関して



グ人間」と自称。人間としての愛情など精神的なものも必要と述べる同氏

遠隔講義をスタート OSIPP 棟、千里エクステンション、社研結び

OSIPPでは今年度から、OSIPP棟(豊中キャンパス)と千里エクステンション(大阪モノレール「千里中央」駅前)、社会経済研究所(吹田キャンパス)とを結ぶ「遠隔講義」に取り組んでいる。3箇所を無線LAN(ローカル・エリア・ネットワーク)でつなぎ、受講生はどの教室でもリアルタイムで同一の講義を聞くことができる。

これを活用している講義の一つがプロジェクト演習「ITと地域情報化政策」(辻正次教授)。教官自身は、OSIPP棟内の講義シアターに来て講義をし、教卓にある操作盤でもう一つの教室、千里エクステンションの様子を確かめながら話をすすめていく。学生は講義シアターのほか、千里エクステンションの教室でも受講でき、映像を大型画面で見ながら、マイクで質疑応答も行える。

今後はさらに、「ITを使った遠隔教育をOSIPPの一つの柱とする」(辻研究科長)ため意欲的な取り組みが計画されている。「OSIPP Lecture Archives」(仮称)は、OSIPPの教育資源をデジタル化して蓄積し、講義をもう一度勉強しなおしたい学生や、他大学、海外の学生がインターネットを通じて、保存された講義にアクセスできるようにするシステム。また、OSIPPからITに関する講義を東南アジアの大学へリアルタイムで発信する「海外遠隔講義」も構想されている。



OSIPP棟内の教室(上)と千里エクステンション(下)を結んだ授業